
ゴールド・ビルド

笠木孝慈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴールド・ビルド

【Nコード】

N5992H

【作者名】

笠木孝慈

【あらすじ】

高校二年の金子建斗は、ある日ある時を境にして、自分の中にある特別な力の存在に気が付いた。それを契機に次々と襲い掛かってくる、自らを『お前の敵』と名乗る人間達。はたして、建斗の運命や如何に！

『第一話』 夢と現実の間には扉が在り、鍵穴が在り、鍵が在る。

「もおーっ、お兄ちゃんっ！ いい加減、妹のお風呂覗くなって言
ったでしょ！ これでお兄ちゃんが覗いたの百九回目だよ！」

煩惱の数を越えたか、我ながらたいしたもんだ。

身内であれ何であれ、これ以上の数の人間に知られたくないような
見つとも無い所業が、これでとうとう百九回目を迎えたことに感心
しつつも、これが夢だということに気付く。今、俺は寝ているのか、
と。現実の俺は今、実際には眠っていて、妹の入浴を覗く夢を見て
いるのか。と、風呂桶やらシャンプーの容器やら石鹸やらを兄に向
かって投げつけてくる妹の裸体を眺めながら、建斗は気付いた。

そもそも、建斗の家族構成に妹など、最初っから存在しなかったの
だ。いるのは姉であって、妹ではない。その姉に対する覗きだって、
さすがに煩惱越えはしていない。だから、建斗は夢だと気付いた。
夢だと気付けた。

そういえば、自分の体が妙に重さを感じていないことにも気付くが、
ああ、今現在、俺は布団で横になっているからか、と建斗はすぐに
納得する。

「今度覗いたらプロポーズしてもらうからね！」

そう言って、家中に響く大きな音と家全体に亘る軽い揺れと共に、
妹はドアを閉めた。

その言葉は、百回目に言うべきだったな、妹よ。ああ、でも、それ
だったら“の”ではなく“に”になってしまうのか。別に、百回プ
ロポーズしているわけではないのだし。

俺と違って父親似なんだな、曇りガラスに淡く映し出された妹のシ
ルエットを見つめながら、その場に佇んでいると、いつしか建斗の

意識は、夢の中から、現実の世界へと戻っていった。

「・・・はっ！ ああ、くそ、もっと積極的になれば良かった」

目覚めて最初に、建斗は目を開けた。目を閉じて眠る動物全てが起きる時にする、本能的行動だった。

そういえば、今まで一度も出来たためしがないよな、と建斗は何気なく思う。目を閉じたまま起きる、ということ。脳は覚醒状態で意識もあるのだが、目だけは開けずに起きるということが、何度か試みてはいるものの、成功したことがないよな、と。

今度また挑戦してみるか、建斗は伸びをしながら、居間へと向かった。

「うーっす我が弟よ。朝の苦手な姉より遅く起きてくるとは何事だー。テレビを点ける新聞持って来い朝飯作れ着替え用意しろ」居間のソファで横たわる建斗の姉、春歩は、不機嫌そうに眉を吊り上げ口元を歪め、お世辞にも魅力的とはほど遠い表情で、言った。

「寝床まで行くのが面倒臭いからってソファで寝やがって。そんな奴に遅く起きてくるとはなんて言われたくねえよ。家着も寝間着も制服女」

皺だらけでよれよれのセーラー服を着た姉に呆れながら、テレビを点ける。テレビでは星座占いがやっていた。建斗の星座は十二位で、姉の是一位だった。少し不愉快になる。

「歯磨きしてこいよ。朝食作ってるから」

「口濯いだからいいや歯磨きは。朝飯できたら起こしてー」
「おやすみー、と言い残し、その後間も無くいびきが響く。」

「絶対、口濯いでないよな。便所と風呂行く以外でソファから離れ

たの見たことないのによ」

すでにノンレム睡眠の域に入った姉には聞こえるはずもなく、諦めて建斗は台所へと向かったのだった。

【第一話】夢と現実の間には扉が在り、鍵穴が在り、鍵が在る。

「なあ、姉ちゃん」

建斗は、溶けたマーガリンが溜まっているトーストの部分をかじりながら、大量のマーガリンを塗りたくりベチャベチャになったトーストの上にハムエッグを乗せ、それを三口で平らげる姉に、夢であった話をしてみることにした。妹のことだ。

「なんだ弟よ」

ゴクン、と建斗の耳にまで聞こえる程の音で、咀嚼物を飲み込む姉。

「もしさ、俺たちに妹が・・・ああ」

弟のハムエッグに、何の躊躇も不自然な動作も無く、それが当然であるが如く、真っ直ぐ手を伸ばして掴み、自分の皿に持っていく姉の、流れるような作業を見ながら、言おうとしていた言葉に詰まる。

夢の中で会った妹は、一体いくつぐらいの設定なのだろうか。分らなかった。

顔は父親似で、完成されているというか、もう出来上がっているというか、幼さは感じられなかったのだが、どうも体の方が、未成熟だったのだ。身体の、女としての起伏が皆無。よって、とても年齢が分かりにくい。

「うーん・・・もし、俺たちに、中三か高一ぐらいの妹がいたとしたら、どんな感じだと思う？ 見た目とか、性格とかさ」

仕方がないので、自分の思った大体の所で聞いてみる。

牛乳を飲んでいた姉は、飲むのを止め、建斗の目を見ながら、不思議そうに首を傾げた。

変に言葉に詰まって考え込んだ挙句、言ったことが、いもしない妹の話とあつたら、それはさすがの姉でも疑問に思うか。建斗は、牛乳の入ったコップの縁に口を付けた。

「・・・ん？」

牛乳の入ったコップの重力以外に、何か引っ張られるような力が加わっている気がする。と思ったら、建斗が口を付けている反対側のコップの縁に姉の人差し指が引っ掛けてあり、その指先は、ズッポリ牛乳に浸っていたのであった。

姉の引っ張る力は本気で、気付いた時には遅く、今から飲もうとした牛乳が口を外れ、テーブルや床に零れ落ちる。

「飲めないだろうが！」

慌ててコップを置き台所から雑巾を持ってきて、零れた牛乳を拭き取りながら、建斗は姉に怒鳴った。

「飲まなくて良いのさ、あたしが飲むから」

置かれたコップを持ち上げ、自分の口へと運んでいく姉。

「代わりと言っちゃあなんだが、この牛乳まみれの指で建斗の鼻ほじってやるぞ。だから怒ってるなら許せ。そして喜べ、興奮しろ、発情しろ、弾けろ」

「どんなアブノーマルだよ！」

白い液体でコーティングされ艶かしく動く姉の人差し指を凝視しながら、取り敢えず、一応、拒否の方向で言葉を返す。いや、ここは素直にプレイを楽しむべきだったか？ と考え直してみるが、朝からそれはまずいだろ、と理性を保ちつつ、雑巾を台所へ持っていく。

「貸せい、弟」

そう言う姉は、建斗の手から雑巾を奪い取り、牛乳で濡れた人差し指を拭いた。雑巾を弟へ投げ渡すと、大あくびとともに、寝ぐせでえらい事になった頭を掻き耷める。

「・・・姉ちゃん。自分が学校で、全校生徒になんて言われてるか知ってるか？」

「がさつ姫だろ」

「少しは自覚しろよ！」

【第一話】夢と現実の間には扉が在り、鍵穴が在り、鍵が在る。

零した牛乳を拭き取った雑巾で指を拭くぐらいなら、自分の舌で舐めた方がマシじゃないか？ まあ、一番良いのは普通に手を洗うことなんだろうけど。少なくとも、俺はそう思うよ。時間になったら起こしてくれい、と学校のある平日なんかには、ソファで三度寝を開始する姉を横目にして、建斗は洗面所へ向かおうとするが、そこで立ち止まる。

「ああ、そういえば、あー、くっそ、すっかり忘れちゃったじゃねえか」

歩みを止め、踵を返し、ソファで横になる姉の傍まで行く。端から端までを占領している姉の膝を折り曲げ、その空いたスペースに座る。座った場所が足元で、その上膝は折り曲げてあるので、スカートを穿いている姉の、パンツが見えてしまった。

三度寝だというのに、すでにグッスリと眠っている姉の姿を見て、呆れる建斗。口を開けいびきを掻くその顔は、単純に不細工だと思った。

姉の膝を揺すり起こそうとするが、なかなか起きない。揺するにつれ開閉する姉の股間を目に焼きつけ、痺れを切らした建斗は、姉をソファから落とした。

「弟、何だかんだ言って、お前もがさつだよな。お姉ちゃんの扱い方。レディの扱い方。がさつだよな」

「こうしないと起きないんだろうが」

さっきの二度寝の時は、朝食があるからすんなり起きてくれたが、今回はこうするしかなかった。いや、今朝に限って言えば、ソファから落とすだけで起きてくれたのだから、まだ良い方だ。建斗は、

今までの朝の風景を思い出し、軽い胸焼けを催す。

それに、いくら身内であっても、惜し気もなくパンツを見せる女がレディであるはずがない。エロさの欠片もないじゃないか。露わになり過ぎているパンツから目を外すことなく、建斗はそう思った。

「んー……。話そうとしたことがいつつも中断されるんだよな。姉ちゃんとだとき」

「あたしだけの所為ではないだろ」

確かにそうだった。建斗は心の中で頷く。

「妹がなんちゃらだっけか」

ソファから落とされた姉は、そのまま床をゴロゴロと転がり、向この壁まで行ったかと思うと建斗の足元まで戻ってきて、先に話を本題へと移行させた。

「……。はあ、聞く姿勢が全然なっちゃあいないのに、ちゃっかししっかり聞いてるんだもんな」

今や制服と言うのさえ間違いないのではないかと思えるぐらいに、グチャグチャになった姉の衣服を憐れみながら、建斗は言う。

むくつと起き上がった姉は、そのまま押し黙り、何やら真剣な表情で考え込んでいた。

姉の真面目な、物事を考察する時の顔は、いつみても、いつもの姉の顔とギャップがあり過ぎて、驚いてしまう。一日中半開きで眠たそうにしている目が、重たそうにしている瞼が、カッと見開いたかと思うと、徐々に鋭く、力強く細くなり、他者に有無を言わせない程の圧を放った目になる。だらしなく開いた口はキュッと閉まり、顔の輪郭が際立つと、金子春歩という存在そのものが、際立ってい

く。

何にも変え難く、耐え難く、美しいと思えてしまう。弟でありながら姉である人を、素直に、率直に、単純に、純粹に、美しく感じてしまう。

それは、金子春歩としての、金子春歩だけの、美しさだった。

それが、全校生徒に“がさつ姫”と言われる由縁なのであった。

「第一話」 夢と現実の間には扉が在り、鍵穴が在り、鍵が在る。

うーんと唸りながら考え込む姉を傍らで見守ること一分、その間建斗は、そこまで難く受け止めないで欲しい、ただの、朝の一時の会話なんだから、と気恥ずかしく思いながらも、邪魔をしてはいけな
いから、声をかけずに黙っていた。

「・・・弟」

一分後、ピッタリ一分後に、何やら心配そうな表情で建斗を見つめる姉。眉間に皺を寄せ、じつと弟の瞳の奥を見据え、真意を探ろうとしている。だから、そこまで重い内容じゃねえだろうが、一層気ま
まずくなる建斗だったが、言葉には出さなかった。

「分かった！ あたしも姉。建斗はたった一人の可愛い弟だ。ここ
は姉ちゃんとして、頑張ってやるよ」

「・・・は？」

意味が分からなかった。二カッと笑い、ろくにまともに磨いてない
のに無駄に白い歯を、八重歯だけ見せる姉。建斗は、何を言い出す
んだ、と露骨に困るしかなかった。

「何を頑張るんだよ」

「いやあ、妹の話したじゃんよ。妹。興味あるんだろ？ でも建斗
に、当たり前あたしにも、妹ちゃんはいない。つったら、行きたい
所はただ一つ。擬似お兄ちゃん体験が出来る店だ。いわゆるサービ
ス業。だけれどそんなの、ここに辺に、こんな田舎にあるわけね
え。そしたら、質の良い妹を求めるのなら、本場、聖地だろ。ただ、
そこまで行くには金がいる。もちろん、その店を利用するにも金が
いる。ただし、金子家には金がねえ。名字に金が入ってるのに金が
ねえ。金は子ども程度にしか持ってないつつうなら、納得するしか

ねえけどよ。とにかく、貧乏だ。だとしたら、あたしの弟が、本場の聖地へ、みんなの妹を、限られた時間だけ、我が物にする為には、この家の家計のほとんどを占めているあたしの食費を、つまりは、あたしの食う量を減らせば、浮く。金ができる。それで建斗は欲望を叶えられる。あたしも幸せだ、建斗が喜ぶなら。だから、頑張つてやるって言うてるんだよ。我慢するって言うてんだよ」

姉は言った。

「俺のお兄ちゃん願望は叶えてくれなくて良いからエンゲル係数だけは確実に減らしてくれ！　っていうか俺お兄ちゃん願望ねえし！」
今現在、最も優先すべきは姉の変な誤解を否定することだったのだが、補足的な言い回しになってしまった。金子家の金銭事情にうんざりする。姉の食欲に嫌気がさす。

そこで一頻り、笑い声が起こった。姉だった。

「んだから、そーいうことっつたろ。弟よ」

テーブルと床に零れた牛乳を拭き取った雑巾で自分の人差し指まで拭き、その指で弟の眉間を小突く姉。あからさまに建斗は、嫌な顔をした。

「そーいうことって、どーいうことだよ」

眉間に押し当てられた姉の細い指を払い除けながら、建斗は聞き返す。そうするしかなかった。

「最初に頑張るって言ったじゃねえか。だから、頑張るんだよ。あたしやあね」

「意味が、分からねえよ」

「何で分からないんだよ。ここは素直にありがとうお姉ちゃん大好きお姉ちゃんだろうが。本当は、妹が欲しいなんて、聖地に行きたいなんて、店を利用したいなんて、建て前なんだろう？ 本音は単純に、貧乏の要因となってる食費を、主にあたしに掛かる食費を減らしたいから、あたしが食う量を抑えて欲しいから、そう言った。遠回しにな。妹の話題を出してね。直接、食い過ぎだ、金掛かる、なんて言ったら姉ちゃんが傷つくと思って、気を遣ってさ。そう言ってくれたのさ。でも、あたしは気付いちやった、可愛い弟の気遣いに。だから、あたしも店に行きたいっていう建て前に乗ったってわけさね。気遣いってものは、ばれないでナンボだもんな」

一応ありがとな、別に直接言ってくれても構わないのに、と建斗の背中を叩く姉。

【第一話】夢と現実の間には扉が在り、鍵穴が在り、鍵が在る。

「入りの時点で勘違いしてるのに、その後更に深読みしやがるから話しが悲惨にひん曲がると思ったら、結果なんか良い方向に進んじやってるじゃねえか！　まさかこの女、無意識下でも世の為人の為弟の為、身を粉にして尽くすようにプログラミングされているのか！」

「粉になった後は気をつけろ、所持してたら警察に捕まるから。犯罪だから」

「本当に粉になったらダメじゃん！　しかも、いけない粉だし！
・
・
・ダメじゃん！」

「はい、冗談はさて置き。本当は何て言おうとしたんだ？　弟」

「・・・お、おお、すっかり忘れていた。突然の急展開だったので、数瞬反応が遅れてしまう。
だから姉ちゃんと話すと、とまた言おうとするが、脱線会話を何気に楽しんでしまっていた自分も悪いよな、と思い止まる。」

「それにしても、話の展開が、下手なサッカーの試合みたいにくるころ変わるよな」

「弟とただだよ」

「嘘つけ」

「当たり前。誰に対してもこんな感じでした」

「知ってました」

「・・・で、何て言おうとしてたんだよ」

姉は、もう飽きてきたのか、かったるそうに同じ質問を繰り返した。

「・・・ああ、はいはい。ってゆうか、本当も何も言葉通りだったの」

「言葉・・・通り？ ふんふん成る程。もしあたしたちに中三高一くらいの妹ちゃんがいたとしたら、見た目とか性格はどんな感じか、ってやつか。なんだよ、そんなことかよ」

「だから、最初っから、そう言ってるじゃねえか。姉ちゃんが延ばしに延ばしたから、そんなことのハードルが上がっちゃったんだよ！」

「だったら、もっと念押せよ」

「明らかに俺の責任じゃないだろ！」

「んー、で、妹ちゃんな」

こんなグダグダな会話、いつもいつでも同じようにしているというのに、一向に慣れない自分に腹が立つ建斗だった。何気ない日常会話のはずだったのにな。嘆息する。

「どうだろうな。ってか、知るわけねえだろ。いもしない妹ちゃんのことなんて。ああー、だから、もしもつつてるのね。オーケイオーケイ。妄想してみましようか。あたしたちの、あたしたちだけの、妹ちゃんをさ」

姉はそこでまた、少しの間考え込む。しかし、さっきのような深刻な表情はなく、むしろどこか楽しんでいるように、建斗には見えた。むふふ、と怪しい息遣いが聞こえてきたので、ああ、楽しんでいるのだな、と確信する。

「妹ちゃん・・・。あたしと建斗は母親似だもんな。どっちかって言ったら、母親似。ああでも、唇の印象が少し違うかもな。そういや、違うな。あたしは、義理堅く情に厚いような唇だけどさ。・・・世論だぞ、あくまでも。建斗は、愛情の欠片も無さそうな、唇だよな。博愛ならぬ、薄愛ってやつ」

そう言いながら、姉は雑巾で拭いた人差し指を、建斗の唇になぞり付ける。どうせなら、綺麗な方の指でやってくれ、と言いたかったが、それは今言うべきことではないなと思い、何も言わずに払い除ける建斗。

「愛情の欠片も無いは余計だ」

「無さそうって言ったんだよ。安心しろ。まあ、そうだな、大まかに言くと、あたしも建斗も母親似だよ。んで、あたしはそこに、母親とは違う、また別種の、女の美貌がプラスされるわけだ。建斗は、残念がプラスされちゃうんだな」

「残念がプラスされるは余計だ」

「されちゃう、って言ったんだよ。少しは同情してんだ、安心しろ。そして更に安心しろ。残念な感じの男が好きな女なんか、世の中沢山いる。いなくたって、あたしが一生愛してやるよ」

素直に恥ずかしいことを、まるで偉人の残した名言の様に言っている姉だった。

「第一話」 夢と現実の間には扉が在り、鍵穴が在り、鍵が在る。

「そこで言ったらあれだな。妹ちゃんは、多分、父親似なんじゃねえか。あたしの希望としては、父親似なんだよな。そうであって欲しいという。まあ、いないんだけどよ、実際は。妹ちゃんなんて」

「ほーう」

自分の見た夢の中の妹と、姉の予想が、姉の理想が、一致したことに不思議な感覚を覚える建斗。

「性格はー、さすがに無理だわ。分からん。知るわけねえよ性格なぞ。ただ、そうだな、まあ強いて言うなら、真面目そうかもな。建斗に風呂覗かれてもしたら、きつちりと回数数えて、しっかりと、何かしらの抵抗は毎回するんじゃないかねえか。要するに、あたしとは真逆な性格だよ。真面目で、几帳面で、女の子らしい。強いて言うならだけだよ」

「へえー」

これまた不気味な程に一致し、建斗は驚いた。夢とは言っていない。妹がいたとしたらどんな感じだ、としか言っていないのに、風呂の話まで出た。まあ、偶然なのだろうが、ここまでシンクロされると、姉は心が読めるんじゃないかと怖くなる。自然と、無の境地になろうと試みる建斗。しかし、無理だった。

そこでまた、姉はうーんと唸り、雑巾で拭いていない方の人差し指を、顎に当てた。

「体はなー。妹ちゃんの体なー」

「・・・いや、姉ちゃん。別に良いよ、妹のボディまで考えなくて、もうそろそろ辻野さん来るだろうし」

時計を見ると、いつも家を出ている時刻になっていた。

「早く学校行く準備しろよ、いつものことだけどさ。遅れるぞ」

「いや、その前に体を考えさせてくれよ」

むふふ、と荒い息遣いで気持ち悪く笑う姉。どんな妄想をしているのか、是非とも映像化して見せて頂きたいよ、と建斗は思う。

「あたしと違って、体の発育は遅そうだと思わないか？ 弟よ」

「知らねえけど。姉ちゃんが発育早かったのは、そんでもって今なお続いているのは、確かだな」

毎日の私生活からは想像も不可能な程に、姉は良い体をしている。この不摂生で、その不摂生で、あの不摂生で、よくぞここまで張り照り艶のある、しかし、爽やかさも掛け持った体に仕上がりが続けることが出来るよな、と感動を越え呆れてしまう建斗だった。グラマ―でセクシーでスレンダーでスマートだ、自分でもそう言っていた。そして、それとは違って、と姉は妹のボディを予想するが、これもまた、自分が見た夢の中の妹と同じであった。

顔、性格、体、夢の中の妹と、姉の想像した妹が見事に合致する。

読心術持ってるのかよ、声には出さず、頭の中で姉に言ってみるが、床に腰を下ろしている姉は何も答えなかった。

やっぱりただの偶然じゃねえか、自分にツツコミを、頭の中でする。

「好みなんだよ、起伏の浅い女の子が。別に、あたしの貪婪ボディと比べて、優越感に浸るためとかじゃねえからな。ただ単に、性的に好きなんだよ」

「そっちの方が問題だ！　つつうか弟にそういうこと堂々と言うんじゃないねえ！　あと貪婪ボディとかもやめろ！　弟の前だぞ！　つつうか誰の前でもやめろ！」

本当に貪婪ボディはやめて欲しい、と建斗は懇願した。けれど、多分これからも言い続けるのだろうか、憂鬱になる。

インターホンが鳴った。

「辻野さんだ」

「じのつつだな」

そう言って、姉は床から立ち上がり、よれよれグシャグシャでろろギミヤギミヤの、ホコリと糸くずだらけの制服で颯爽と外へ出ていった。歯磨きもせず、顔も洗わず、出ていった。

「いろんな所の戸締まりよろしくな」

「いろんな所っても、玄関ぐらいしかねえだろ」

俺に戸締まりのことを言うなんて珍しいこともあるもんだな、呑気にそう思っていると、自分も急がないといけないことに気付き、慌てて身支度を済ませ、家を出る建斗。

そういえば今朝の星座占いでも、俺の星座は戸締まりに気を付けろとあったっけか。思い出す。

「だからどこのだよ」

そう言いながら、建斗は学校へと向かった。

『第二話』 夢と達成の間には扉が在り、鍵穴が在り、鍵が在る。

建斗は、道を歩いていった。通学路である。

そこまで家を出るのに時間差は無かったはずだが、長い一直線の通学路のその先には、もう姉と辻野さんの姿は見えなくなっていた。あの二人は、歩くのが異常に速いのだ。

「道もさ、その原初は、誰も通らない、何も通らない、ただの野っ原だったんだよな」

後ろから声が聞こえたので建斗は後ろを振り向くが、そこには誰もいなく、前を向くとそこに男が一人、立っていた。同じクラスで小学校からの付き合いの九尾塚汰貫だった。

「お早う。挨拶はしといた方がよいぞ、これからの為にもな。で、今日はなんだ、汰貫」

「いつも通り、俺流哲学だ。いいかよく聞け。今はこうやって、人々が往来する道でも、初めは誰かが必ず『そこ』を歩き始めて、どんどんと道になっていったんだ。これはさ、そのまま人類の挑戦と進化、こう置き換えられると思わないか？」

「思ったことすらないからな。突然そう言われても・・・」
事実だった。真面目に答えてしまう自分に、つくづくお前はお人好しだよな、と言ってやりたくなる建斗。

「で、その心は？」

九尾塚はそこで息を大きく吸い、あからさまに勿体付けて、ようやく話し始める。

「未知を歩く、ってことだよ」

心地の良い風が左から右へ吹き、黒猫が右から左へと、建斗たちの目の前を横切った。横切った後に、黒猫がこちらを見て、思いの外低い声でにゃあと鳴く。どうか俺ではなく九尾塚でありますように、九尾塚を見て鳴いていますように。そんなことで頭が一杯だった。

「意味、分かったか？」

「・・・ああ、悪いけど、質の低い言葉遊びっていうことしか分かってなかった」

「質は良いか悪いかだろ」

「クオリティは高いか低いからだぞ」

「質の話してんだよ」

「もっとグローバルになれ。今後の為にもな」

屁理屈と知っていても、俺流哲学よりは全然マシだろうと、自信を持って思う建斗。

「今は賛同者が黒猫だけかも知らねえけど、いつか絶対、自分の言葉で全世界の人間たちの心を動かしてやるんだよ。俺は。そんな時は、お前を会員ナンバー一番にしてやるからな」

拳を突き出し、歯を見せ笑う九尾塚。目には、説得力とは違う、もっと曖昧なのだが、期待してしてしまうような力があつた。自分には無い目だよなー、と何となく上を見る。

「それこそいいか、お前も・・・っつか俺は聞いてなかったけど、

お前は聞いとけ。よくな。黒猫も別に賛同してねえし、高二にもな
って、いつか絶対なんて言葉は使わない方が良いし、俺、会員ナン
バーいらねえし、そんな軽っちょろい組織みたいなのには、するべ
きではないと思うぞ」

建斗は、そんな未来を諦めさせる為に言ったことだったのだが、九
尾塚に意気揚々とお礼を言われてしまった。アドバイスだと勘違い
されたらしい。応援だと受け取られたらしい。まあ、小学校からの
付き合いだし、大方そうだろうとは思ってたし、そもそも、いつも
の会話だったので、少ないカロリーで受け流した。

「お前だって、将来の夢とかないじゃねえかよ。そっちの方が俺は
ダメだと思うけどな！ ガキの頃からの付き合いだけどさ、何がし
たいか、分かったことないぜ、俺」

九尾塚の言葉に建斗は、今の言葉で建斗は、間違はなく心を動かさ
れた。というより心の形が変わった。建斗はへこんでしまったのだ。

「くっそ、てめえ、そのたまにくるグサツの言葉、どうせなら俺流
哲学に注げよ」

抵抗ではなく、ただの愚痴だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5992h/>

ゴールド・ビルド

2010年11月17日02時56分発行